

## 書籍：「脳内汚染」を読んで

最近、一般常識では不可解な、青少年による家族すら対象とする殺傷事件が続いているだけに、その精神的構造背景の理解の参考になるかなと思い、医療少年院に勤務する精神科医の著書：「脳内汚染」を購読した。

本書は、メディア（TV、ビデオ、ゲーム機、ネット）が子どもに及ぼす影響を、国内外の実態調査資料や各事件の背景の検証から原因を探ろうとし、また、その影響が子どもの「柔軟で、吸収力と可塑性に富んだ」脳の発達にどう影響するかを、脳の生理学的機能からも迫ろうとする書であった。

著者は、メディアが子どもを虜にする脳の生理学的メカニズムにも触れ、メディアから得る快感が、より強い刺激を求めていく薬物中毒のように、子どもの中にメディアへの中毒性を育む危険性から、「脳内汚染」という言葉を使用しているよう。

「脳内汚染」が、「無気力、無感覚となり、現実世界に積極的な関心や主体的な関与をすることをやめ、ただ目の前の快・不快だけに左右され、自らを傷つけることも、他人を傷つけることにも無頓着になっていくという現象の、根本的な原因の一つ」という。

また、一人で出来るゲーム機が子ども部屋に侵入した結果、「子どもたちは生の人間や現実を相手にして、言葉や体を使って、絶えずコミュニケーションを交わしながら、人間関係や社会関係のルールや機微を学んでいく機会を失っている。」と著者は警告する。

確かにゲーム内の仮想世界では「回避か攻撃か」を常に問われ、こうした単純な思考回路がゲームすることで幼い時から脳内に形成されると、仮想と現実の区別がつかなくなり、青年期になっても判断は二者択一的思考行動に成り易いだろう。

幼い時からのメディアによる汚染が青少年期の思考にすら影響することから、著者は、社会全体としてメディアのあり方に大人がもっと関心を持ち、脳内汚染から子どもを守るべきでないかと提言している。

また、自己コントロール力を培うために前頭連合野の働きである「考える」ことの大事さを主張している。

環境・食料汚染問題は声高に叫ばれ対策も直ぐに講じられるのに、「脳内汚染」問題は次世代を担う子どもたちの精神構造に関する重要な問題だけに、メディアと脳の思考回路の因果関係云々はさておき、予防策としても真剣に議論されるべきでないだろうか。